

世界的に流行する「もつひろこの病」

史上初の世界「大インフォデミック」との闘い 神戸市議会議員・元国会議員政策秘書 岡田裕二

新型コロナウイルスが世界を席巻するなか、偽ニュースも氾濫している。世界保健機関（WHO）は2月2日、偽のニュースが横行する現状を示すために「インフォメーション」(information・情報)と「エビデミック」(epidemic・伝染病)を合わせた「インフォデミック」(infodemic)、すなわち「情報伝染病」という用語まで持ち出して、「公衆衛生上のリスクをもたらす、もうひとつの病」と闘い抜く決意を示した。

有名な偽ニュースの例としては、「中国からの宅配物や郵便物を受け取ると感染する」というものがある。実際は、箱や封筒の表面では、ウイルスは長生きできないため、危険性はほとんどない。ウイルスとの闘いに全力を傾けなければならぬなか、偽ニュースのために混乱を来して、不必要な労力が注がれている。米国の外

交専門誌『フォーリン・ポリシー』は、「新型コロナウイルスより偽ニュースのほうが、拡散速度が速い」と指摘した。偽ニュースは大衆の漠然とした不安を増幅するだけでなく、防疫当局の労力を本来不要な作業に割かせることになり、結果的に感染症への対処を妨げる。

現在のような危機状況で虚偽の情報や流言を流布するのは反社会的行為である。偽のニュースをなくす確実な方法のひとつは、当局の信頼性を高めることだ。迅速かつ透明な情報公開と対処で、偽ニュースに付け入るスキを与えないことが重要である。正しい感染症情報を広く知らせる民間部門の努力にも支援を惜しんではならない。

ツイッターの世界的流行など、人類がかつて経験したことのない瞬間接続の現代社会では、治療法のない新種のウイルスだけでなく、意図的歪曲情報と未確認の噂もま

た、個人と社会の健康を脅かす病原体として機能している。そうした意味で今回の新型肺炎禍は、史上初の、世界大インフォデミックの初舞台となった。

新型コロナウイルスが厄介なのは、完全かつ徹底した防疫が不可能だということである。無症状の潜伏期間が長く、多くの人と物資の移動が日常になった今の世の中で、感染源の完璧なブロックは事実上不可能だ。1次戦線が「防疫」なら、「免疫強化」と「効果的治療」が2次、3次戦線である。現在、厚労省もこの3段階のフェーズをスキーム化し、対応に臨んでいる。

インフォデミックとの戦いも非常に似ている。誰でも思い切り主張を展開して伝播させることができる個人メディア、ソーシャルメディア環境の超連結社会においては、歪曲情報、偽物ニュース

を源泉で遮断したり、情報統制をするなどの「防疫」はできない。本物と偽物が混ざっている情報の山から、情報の利用主体が自ら真偽を鑑別することができない能力を涵養することこそが、「免疫強化」であると言える。

目に見えないウイルスの対応法で、手洗いとマスク、社会的距離を置くなどの個人の衛生・免疫力の強化が必要とされているように、インフォデミックに対しても、個人的な対応能力がカギだ。すなわち情報リテラシー(情報判別能力)である。

偽情報を「篩にかける」

それでは、偽の情報が飛び交うインフォデミック状況下で、偽のニュース、フェイク情報を判別する方法とは何だろうか。

ワシントン州立大学のデジタルリテラシーの専門家、マイク・コイルフィールド氏は、過去4年間、大学生を対象にネット上の偽情報を識別する方法を研究してきた。彼は自分が研究した情報リテラシ

ーのノウハウを「コロナウイルス判別法」と題し、自らのサイト(『fodemic.blog』)を通じて公開している。すなわち、ソーシャルメディアなどで未確認情報に遭遇した際の、真偽判別のための方法論と共通原則である。

コイルフィールド氏は4つの共通原則の頭文字を取って「SIFT」(ふるいにかける)と呼ぶ。すなわち、①利用停止(Stop)、②ソースの参照(Investigate the source)、③他の情報を検証(Find better coverage)、④原文からの引用のされ方の確認(Trace claims、quotes and media to the original context)。



真の情報を判別する重要性

例えば、ツイッターで1日に12万回以上「リツイート」(共有)され、100万人以上の目にとまった記事がある。それは、「手の消毒剤は、細菌物質に効果があるが、新型コロナウイルスであるため、手の消毒剤で洗浄する意味がない。科学者として、こんな基礎的なものまで指摘しなければならぬ」とは、くたびれる」というような内容だった。

このような主張に接した際、無条件で情報を受容したり共有したりしないことが重要である。しばしば私たちは、ソーシャルメディアの記事を、自分が読み終えてもいない段階で、「とりあえず共有」してしまふことも多い。危険な姿勢だ。その主張が正しいか否かは、検索ウィンドウで手の消毒剤のウイルス除去効果を調べれば、簡単に確認することができる。

そもそも、医療関係当局や報道機関が発信している情報が沢山ある。そして自分が科学者と主張している人物の、記事の真偽を確認するためには、そのアカウントのプロフィールやほかの記事を見る

ことも大事だ。上記の問題記事を投稿した科学者は、記事が炎上するや否や、すぐ記事を削除した。

コイルフィールド氏は、なぜ人々が簡単に虚偽の情報に陥るかについて、興味深い分析を披露している。彼曰く、「人々は学校で12年間、提示されたテキストを読んで、そこに込められた内容を把握するような方法で『批判的思考』の訓練を受けてきた。しかし、真のファクトチェッカーは、それとは真逆の行動をする」。

すなわち、テキストを提示されれば、一旦そこから抜け出て、別の思考の窓を開き、そもそも記事が作成された文脈や、記事の作成者の真の意図が何なのかをまず検証する。大事なことは、ファクトチェックで指定されたテキストの文脈の中身から、論理的矛盾や欠陥を探そうとしても、ほとんど効果がないということだ。テキストから抜け出して、ほかの主張と情報を発見し、比較検証する「クロス検証」の姿勢が必要不可欠だ。不確かな情報を検証することは、これまで以上に簡単になったが、同

時に偽情報の影響力と危険性もこれまで以上に大きくなった。新型コロナウイルスに伴う今回のインフォデミックは、虚偽の情報を選別する能力が情報社会で致命的に重要となったことを知らしめている。偽のニュースは変種ウイルスのように進化し続け、急速に拡散されるため、根絶が難しい。そうであればなおさら長期的、本質的なアプローチが求められる。

人間は元来、事実と嘘とを区別する能力に優れていない。英国のウインストン・チャーチルは、「嘘が世界を半周した頃、真実はまだズボン履こうとしている」との名言を残している。現代に氾濫したスマートツールは、必ずしも人間の偽判別能力を向上させていない。もっともらしい、魅力的に迫ってくる情報を積極的に受け入れる能力は、人間の本能である。しかし、そのような情報を批判的に検証し、吟味する能力は、本能的に備わっていない。批判的思考を育て、情報判別能力を育てることこそ、国と社会が現在の世界を生き延びる、必要十分条件だ。